AYAKO IMAMURA ESSEY

*

世界は優しくささやく

- sounds so beautiful everyday -

photograph by Koji Matsumoto

vol.06 コミュニケーション

今年の夏、沖縄から北海道の宗谷岬を目指して自転車で伴走者と二人で縦断をしました。

私の生涯のテーマでもあり、人間なら誰もが一度は悩む、または悩んでいる「コミュニケーション」を映画の中心に据えて、地域で出会った人たちとの触れ合いを映画にするために。

その旅を終えた今、感じるのは私にとって宗谷岬はゴールというより、スタートラインだなということ。迷路のようになっている居酒屋で、お手洗いに行った時、もとの場所へ戻ることができず、迷子になってしまうくらいのド方向音痴な私にとって、自転車の旅は毎日が苦手なことの連続でした。毎回、よく道に迷いました。

そのたび、地元の人や交番でお巡りさんに道の説明をしてもらっても口の動きが小さくて分かりづらく、また暑い中、相手に何回も説明してもらうのは申し訳ないという気持ちで、分からないのにうなずいてしまうこともありました。また、親切に筆談で書いてもらっても字が読みにくく、だんだん人に聞くこと自体が億劫になってしまい、自分の勘が一番頼りにならないのに、自分の勘で！とやけっぱちになって、結局、かなり遠回りをして、すごくくたびれて不機嫌になってしまうということもありました。（これは私が耳が悪いからというより、私の聞き方がうまくない、自分が分からなかった時、どのように聞くかという問題で、要は私のコミュニケーション力のなさです）。一人で勇気を出して飛び込んだ居酒屋で、オーナーやお客さんと筆談で話すという1対1の会話なら何とかできるようになっても、1対複数だと話の内容についていけず、どういうタイミングで聞けばいいのか分からず、我慢して辛くなり、どうすればいいのか分からず、そういう場面を避けてしまっていました。複数の人との会話で内容が分からない。書いてほしいけれど、申し訳ないし、また、言うタイミングが分からないと私が黙って我慢していたら、相手が、私が聞こえないから分からないのかな。それとも話題に興味がないから入りたくないのかな。どうやって伝えればいいのだろうかと、私のことを一生懸命考えて余計に疲れさせてしまう、ということを伴走者に言われ、「分からないから我慢する、というのはお互いにとってプラスにならない。損だ。」と言われました。

また、「書いてもらえると嬉しいです」ときちんと言葉にせず、一方的に気づいてほしいというのは甘えだと伴走者に前から指摘されていました。そのことを思い出し、私は自分を守っていただけなのかなと思いました。「書くの、めんどくさい。」という顔をされて傷つきたくない、分からないことを聞くのは恥ずかしいと、分かったふりをしたり、我慢したりしてしまいます。

旅も終わりに差し掛かった北海道で、オーストラリアから日本に来て自転車で旅をしているウィルと出会い、最後の6日間は伴走者とウィルと3人で走りました。宗谷岬に着いた晩は、稚内のライダーズハウス「みどりの湯」に泊まりました。そこは全国から宗谷岬を目指して集まるライダーが宿泊に使うところです。毎晩、全員が居間に集まり、順番に自己紹介をします。伴走者に「映画的にはいいよ」と言われましたが、大勢の見知らぬ人たちの中に入って会話をするというのは、今までの旅の中で一番苦手な課題で、できれば、避けたいことです。旅の最後の夜だから、ウィルと伴走者と3人で旅のことを思い出しながら色々語り合いたいという気持ちもすごくありました。しかし、宗谷岬へとペダルを漕ぐ中で、もう終わっちゃうんだ…でも、自分はまだ何も出来てない、乗り越えてないと苦い気持ちが込み上げてきました。その気持ちは自分が苦手なことから逃げ続けている限り続くとこれまでの人生で嫌というほど感じているので、一つのチャンスだと無理やり思い込み、ライダーハウスに泊まることにしました。夜の自己紹介タイムの時、伴走者もウィルも私のために離れて座り、とても心細かったけれど、伴走者が、「（オーナーの）おばさんを味方につけるといいよ」とヒントをくれ、おばさんに筆談で映画のことを話したら、自己紹介タイムの時に私のことを紹介してくれ、皆とつながるキッカケを作ってくれました。勇気を振り絞って何人かの青年に筆談で話しかけると向こうも笑顔で筆談で話してくれ、楽しく話すことが出来ました。その時、自分から飛び込めば、世界は拓けるのだと身体と心で感じました。

何人かの方に「宗谷岬へゴールすることができ、自信になったでしょう」と言葉をいただきました。でも、まだ一歩しか踏み出せていないので、今の私に自信はあるかと言われたら、答えは「ない」です。これからは苦手なコミュニケーションと向き合い、考えて、工夫して自分で出来た！通じ合えて嬉しい！という経験を積み重ねていこうと思っています。

今村彩子 いまむら・あやこ

名古屋出身／Studio AYA代表

愛知県立豊橋聾学校高等部卒業、愛知教育大学教育学部卒業。大学在籍中にカリフォルニア州立大学ノースリッジ校に留学し、映画制作・アメリカ手話を学ぶ。現在、名古屋学院大学・愛知学院大学で講師をする一方、ドキュメンタリー映画制作で国内だけにとどまらず、アメリカやカナダ、韓国、ミャンマーなど海外にも取材に行く。代表作である「珈琲とエンピツ」（2011）は全国の劇場で公開された。東日本大震災の被災した聞こえない人を2年4ヶ月間取材し、「架け橋　きこえなかった3.11」（2013）を制作。全国各地で上映され、昨年5月にはドイツ・フランクフルトで開催された日本映画専門映画祭「ニッポン・コネクション」での上映を果たした。